

PDF小説版

# まじかる☆あわーず

— 強盗襲撃!?! —

原作・絵：三朝 夕夏  
企画・原案：DAI  
シナリオ：月見



ひなた古書堂 / Project Magical Hours



この世界は『魔法』で満ちている。

空を飛ぶ、他者に変化する、そして性別すらも魔法で変える事が出来る。もつとも性転換の魔法なんてややこしいだけなんだけどね。

そんな世界で生きる私こと、朝野 雫（あさの しずく）は、見習い魔法使い。

世界最高の魔導師と謳（うた）われるセヴィー・バーラーを師匠と仰ぎ、日々魔法の修行に明け暮れている……って言えば聞こえはいいんだけどなあ……。

確かに魔法の修行は厳しいけど、その半分はセヴィーの悪ふざけというか……

ともかく、師匠のセヴィーは、優秀であるが、いたずらも多い、癖のある人間なのだ。

この前も、ちよつとした事件があつただけけど、その話を語ろうと思う。

「え、今から泊りがけでお仕事ですか？」

ここは、セヴィーの屋敷。ここで働くメイドさんである桜 萌黄（さくらもえぎ）は少々驚いた声を上げた。

「うん、セヴィーが国境警察から受けた緊急の仕事なんだって」

「……私達もついて行くんですか？ 邪魔になるかと思うんですが……」  
そうは言いながらも萌黄は、キビキビと準備を進めている。

私とは言えば、セヴィーの考えなど分かる訳もなく、すでに支度を終えている。

ほどなくして、私・萌黄・セヴィーの三人は、とある街へと出掛ける事になった。



「わあ、風光明媚（ふうこうめいび）なところですねえ」

訪れたその街は、夜景が綺麗な観光地だった。仕事とはいえ心が弾む。

「ねえセヴィー、仕事終わったら、少し遊んで行こうよっ」

私の言葉にセヴィーはにっこりと微笑んで返した。

街を少し歩くと、目的地である宿屋に着いた。

クラシックな見かけだが、味わいのある良さそうな宿屋である。

そこで私達は、宿のレストランで夕食を頂き、部屋で休む事にした。

セヴィーは、仕事の打ち合わせがあるとの事を出掛けていった。

「はあ、ご飯美味しかったねえ。あ、そだ、萌ちゃん、この宿、露天風呂があるんだって、後で行こうよっ」

「露天風呂ですかあ、いいですねえ」

仕事の事など忘れて私達は、旅行気分を満喫していた。

カチャリ……

その時、私達は静かに開くドアにまるで気づく事はなかった。

侵入者はゆっくりと近づき、距離を詰めたトコロで……

「キャアツ、ん、むぐうう……」

侵入者は女性だった。

左手で萌黄の口を塞ぎ、右手に持ったナイフを首元に置き、彼女の動きを封じている。

「こ、このっ、萌ちゃんを離してっ」

とっさに、セヴィーより護身用に覚えさせられた衝撃と麻痺を引き起こす魔法を放つ。対象者のみに有効な使い勝手のいい魔法だった。セクハラをしてきたセヴィーにしか使った事がなかったけど……。

魔法は確かにその効果を発揮し、閃光が侵入者を打つ。

しかし次の瞬間、閃光は消え、魔法は打ち消された。

「ちよっ、え、なんでっ」

未だに侵入者の腕の中でもがく萌黄。そして私は見たのだ、侵入者の両腕に光る銀色のブレスレットを。

「魔法無効化処理装具（マジックキャンセラー）」

セヴィー直伝の魔法を無効化するぐらいだから、それは相当に高レベルな代物だとわかる。そしてそれは、私の魔法のほぼ全て無効化される事を意味していた。

侵入者は、にんまりと笑う。まるで私の魔法が通じない事を知っていたかのように……。

「うむうう、むむむう……」

身動きの取れない萌黄は、そんな中でも私を氣遣って「逃げて」と微かなジェスチャーやうめき声でそれを伝えてくれるのがわかる。

「……」

「おーけー、わかったよ……私達の負け」

私は両手を挙げた。

侵入者は、またにんまりと笑った。

「……その子の人質に取るって事は、私達を殺す気はないんでしよう。アナタの指示に従う事にする……」

「むむうーにむうううっーに」

萌黄の悔しそうな、そして怒っているような顔が私の眼に焼き付いた。

侵入者は、一言二言話すだけの無口な女性だった。改めて見ると、地味な姿をしているが動きやすく、そして小ぶりだが使い勝手の良さそうなナイフを所持。どう見てもカタギの人間とは思えない。

セヴィーに昔聞いた事がある。

この近辺をねぐらにしている少数の盗賊の話。金品強奪などを主にして、決して殺傷はしないのが特徴。気が付いたら盗賊は姿を消している

ため、捕まえる事が出来ずに国境警察も手を焼いているとか。目の前の侵入者は、多分その盗賊の一人なんだろう。

（もしかしたら、セヴィーは、その盗賊を捕まえるために今回の仕事を引き受けたんじゃないかな。でも私達が捕まっちゃ……ダメじゃん……）

盗賊は私に縄の束を投げ、小さく「この子を縛れ」と言ってきた。

萌黄を縛るなんて正直嫌だったけど、大人しく言う事を聞いて入れば、命の危機まではないだろうと考えていた。

「ちよつと窮屈だけど我慢してね」

しかし、ぷいっと顔を横に背け、明らかに怒っている仕草。私、何かしちゃったかな……。

盗賊よりもなんで萌黄を怒らせちゃったのが気になりつつも、私は縄を持ち縛り始めた。

萌黄は椅子に座った状態だが、後ろには盗賊が、その手にはナイフが光っている。抵抗は危険を増すだけだ。

私は彼女の両足を揃え、両足首にロープを巻きつけ、次に膝部分を縛り、足の拘束が終わる。

その段階で盗賊が萌黄から少し離れたので、私はそつと話かけてみる。  
「萌ちゃん、大丈夫♡心配しなくても、セヴィーが助けてくれるよ、きつと」

「ええ、さつきはごめんなさい、その……あんな態度を……」  
話を聞くと、萌黄は私に逃げて欲しかったようだ。危険を犯してまで、わざわざ捕まらずに逃げて欲しかった……と。

「でも私と萌ちゃんが逆の立場でも同じことしたでしょ」  
「ふふ、そうですね」

こんな状況だったからこそ、お互いを想う気持ちが嬉しかった。

「萌ちゃん、がんばろうね、私の縛り方はちよつと厳しいよ」

「いえ……もつとキツくても大丈夫です」

「わー大胆」

しかし盗賊はこの会話が気に入らない様子で、今度は猿轡をするよう

に要求してきた。

私は渡された細長い布を萌黄の小さな口に噛まし、布の両端を結びつける。

「ふいふいふふあんう……（卑ちゃん……）」

萌黄の可愛い声が布キレに塞がれて、でも逆にそれが、息を絡ませて、いつもよりずっと……甘く感じる。

最後に手を後ろに回し、椅子の背もたれを抱えるように両手首を縛った。そして彼女の身体と椅子がくっつくように縄を何度も巻き付ける。彼女の大きな胸の上下にはキツく縄が締め、見た目にも簡単には解けないし、身動きが取れないようになった。

私は少しの間だけ、そんな萌黄を見つめていたが、盗賊はそれを遮るように、また縄の束を投げつけ指示を出した。

「え、自分で自分の足を縛るの。あの……抵抗とかしないですし、面倒なんで縛ってもらえると……あーはい、やればいいんでしょ、やれば」  
体育座りになり、両足首に縄を巻き付け、膝や太ももなどもキツく縛る。最後は自分で猿轡まで噛んだ。



「ん、んんうこ

私の手は盗賊が固く後ろ手に縛り、そのままベットの土上へと投げられた。

盗賊はまたにんまり笑顔を浮かべ、私達の部屋を出て行く。その際ドアの脇にある小さいテーブルには、小さな銀色の物体を置いた。

「んん：：ふあ、ふあんひふあふいつふふえふこ（あ、アンチ・マジック・シエル）」

一定空間の魔力減退・魔法無効化する道具、反魔法結界（アンチ・マジック・シエル）。

噂の盗賊とは言え、何故これだけの対魔法使いの道具を揃えているのか疑問だった。しかし、今は縄抜けと脱出が優先。萌黄は椅子に縛り付けられ、私は魔法を封じられ手足を拘束。とても厳しい状況だった。

「んん：：ふむうう：：」

私は身をよじつて、縄から手足を抜けさせようと試（こころ）みた。

「んっ：：んんっ：：んんうっ：：んんっ：：」

萌黄もなんとか縄抜けを試（ため）しているが、私の縛り方が予想よりも強く、びくともしない。

私は自力での縄抜けを一度止めて、ベットから立ち上がった。

「んんゝ…ふおつふお（よつと）」

一本の棒のように立った私は、そのままピョンピョンと飛び跳ね、萌黄の元へと近づいた。

そのまま椅子の裏側まで進み、縛られた萌黄の手に自分の猿轡部分を当てた。それに気づいた萌黄も布に手を引っかける。

体験版はここまでとなります。

ここまでお読み頂きましてありがとうございます。

もしお気に召しましたら、本編『まじかる★あわーず』をどうぞよろしくお願い致します。

ひなた古書堂  
月見

